

国際シンポジウム「東亜同文書院の中国研究—その現代的意味」

特集にあたって

東亜同文書院大学記念センター長
愛知大学教授

三好 章

ここに掲載するのは、2014年12月13日、愛知大学豊橋校舎にて行われた東亜同文書院大学記念センター主催の国際シンポジウム「東亜同文書院の中国研究—その現代的意味」での報告をもとにした論考です。このシンポジウムは、以下のような趣旨で開催されました。

愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、研究プロジェクト「愛知大学東亜同文書院大学記念センターの情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究の推進プロジェクト」によって、文部科学省の2006年度私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）に選定され、さらに2012年からは文科省の私立大学戦略的研究基盤整備支援事業に選定された「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」プロジェクトを開始しました。今回のシンポジウム「東亜同文書院の中国研究—その現代的意味」は、このプロジェクトの一環として、「書院の教育と中国研究システム」グループが行うものです。約100年前に行われた東亜同文書院の中国研究、清末民国初期の中国に対する調査と研究の持つ現代的意味を検討することを目的としています。

本グループは2013年2月21日、本学国際問題研究所との共催で「ワークショップ 淨圓寺・鳥居観音資料から見る近代日中関係」を実施し、東亜同文書院に学んだ水野梅暁・藤井草宣の足跡に関わる史料状況の一端を明らかにし、関係者の証言をお聴きました。そして、2013年度にはそこで蒐集した史料の整理、デジタル化を進める一方で、書院の行った中国研究の現代的意味の検討を進めるようになりました。

東亜同文書院が開設された1901年は、丁度義和団事件が終息に向かうころであり、また列強による中国の「瓜分」が進みつつあり、日本も多方面にわたり盛んに中国との関係を深めていったころでした。しかしそれは同時に、日本にとっても列強の圧力、アジアの変革という時代の変化を意識せざるを得ない時期でもありました。書院そのものの設立が根津一や荒尾精、そして近衛篤磨という明治の人々の時代への危機意識に由来している事はいうまでもありません。

そうした当時の書院関係者が直面した中国に於ける課題は、いかにして商取引を行うかであり、そのための人材育成、実地調査そして研究でした。明治日本が目標とした西欧とは全く異なる中国社会の現実に対し、高みからではなく、足を地に着けて立ち向かっていったわけで、そうした中で培われた理論に先走る事無く事実を検討する学風が書院の特徴といってもよいかも知れません。

例えば、そうした書院の研究者のうち、最初期の教授である根岸侷はその代表格と言えるでしょう。根岸は調査と実証を積み重ねながらギルドを中国社会の本質と捉えました。根岸の研究は最終的に『中国のギルド』に結実しますが、その影響は研究の初期から、書

院の内田直作以外にも今堀誠二、仁井田陞、平野義太郎、村松祐次など、多方面にわたる勿々たる日本の中国研究者に多大な影響を与えました。根岸の研究は日本に於ける科学的な中国社会研究に先鞭を付けたものと言えるでしょう。それは、根岸の研究が中国社会の「特殊性」への視角を、その実態から確保し得たからではないでしょうか。

このような、根岸佶に代表される東亜同文書院の中国研究のありよう、それによって培われ育てられた学生たちの活動を検討し、さらにそれらの世界史的意味を考えようとするのが今回のシンポジウムの目的です。レイノルズ報告では“Think out of the box (枠の外を見よ)”という立場からアメリカが第二次大戦後行ってきた“bottom-up”型の地域研究と異なり、同文書院のそれが“top-down”型であったことは世界の先端を行っていたと指摘し、湯原健一報告では書院で養成した中国語能力修得者が満洲において活動の天地を得ていた実態を指摘し、石井報告では書院初期の教授である根岸佶による中国社会研究が現在もなお持つ有効性について、三好報告では同じく根岸佶に関して、根岸を日本の中国史研究の中に再定置したものです。また、仁木報告は講演として掲載し、アメリカにおける書院とその周辺の史料状況および研究状況を説明しております。

今回のシンポジウムを通して、本格的な100年前の中国研究の再評価を、イデオロギー抜きで行えたことに一定の満足を感じると共に、さらなる近代日中関係における書院の研究機関、教育機関としての役割の見直しを進めていきたいと考えております。